

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2016年2月 別冊



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com

カンボジア・ベトナム8日間の旅

2016年2月16日(火) - 23日(火) 8日間

民族の歴史と文化、栄光と悲劇に触れ

豊かな自然と美味しい料理を楽しむ

KEAFが支援する農村の貧しいけど

元気に学んでいる子どもたちを訪ねる

訪問先：

カンボジア

- ・シエムレアップ

アンコール遺跡群、トンレサップ湖水上村
王宮ダンス鑑賞など

- ・プノンペン

王宮、歴史博物館、新ビジネスセンター
中央市場など

- ・プレアスダイ

プロモルプロム高校、ベトナム国境の町

ベトナム

- ・ホーチミン

旧大統領官邸、戦争博物館、カトリック聖堂、
ドンコイ通りショッピングなど

- ・クチ

米軍絨毯爆撃に耐え抜いたゲリラの地下トン
ネル基地

- ・メコンデルタ

中心の町ミトーからクルーズでタイタン島果
樹園訪問



写真：アンコール遺跡に多くみられるアスバラ（天女）彫像

「栄光と悲劇の国—カンボジア、昔と今」

栄光のアンコール王朝

扶南王国 メコンデルタ地帯では有史以前から水利・灌漑施設を持つ稲作文明が存在したといわれる。1~2世紀にクメール人の最初の王国「扶南」が成立。クメール人は周辺のモンゴロイド（中国系）とは違って、マラヨ・ポリネシア語系の太平洋民族と、インド北東部からビルマにかけて分布するモン・クメール語系先住民族との混血とされる。インド文明（ヒンズー教）の系列。

王国の中心は現在のプレイヴェン州プレアスダイ郡（KEAFの支援活動の中心地）とされる。

チャンパと抗争 ベトナム南部（現在の中部）に2世紀終わりごろ、チャンパ王国（中国の呼び名は林邑。唐時代からは占城）が生まれた。チャム族も同じマラヨ・ポリネシア語系で、インド文明の影響を受けていた。10-11世紀には100年余りにわたってクメール王国と戦争、ベトナムの圧迫も受けて、18世紀にはほとんど滅亡。

アンコールワット 扶南の北方の属国、カンブジア（真臘）が勢力を広げ、9世紀にアンコール王朝が始まった。スーリヤバルマン2世（1113-50）がアンコールワットを建設、3回にわたってベトナムに侵攻し、チャンパを一時支配。しかし手痛い反撃を蒙った。

ジャヤバルマン7世（1181-1201）はチャンパを撃退、ビルマ、ラオス、マレー半島の一部を制圧してインドシナ最大の王国を築いた。同7世はヒンズー教から仏教に改宗してアンコールトムを建設。

隣国の圧迫—小国に転落

タイの勃興 中国南部の雲南にいたタイ民族が蒙古の侵略に圧迫されて南下をはじめ、13世紀スコタイ王朝、15世紀アユタヤ王朝を開いてカンボジアを侵食。18世紀には現在に続くチャクリ王朝が生れた。カンボジアは圧迫されて1431年に首都アンコールを放棄して各地を転々と逃げ回ることになった。

「ベトナム頼み」が災い招く カンボジアはタイの圧力をかわそうと17世紀にベトナム王家から妃を迎え入れたが、ベトナムはこれに乗じてメコンデルタに進出、18世紀半ばまでに大半を併合。カンボジアはタイとベトナム両国の属国的な小国に転落した。

仏植民地支配

仏保護国 フランスは英国とともに中国侵略を進めながら、並行してベトナム、ラオス、カンボジアを次々に軍事侵略、カンボジアは1863年保護領に。フランスは1887年仏領インドシナ連邦結成。異民族支配に対する抵抗・独立運動が執拗に続き、第1次世界大戦をはさんで1930年には3国の共産主義勢力が提携するインドシナ共産党が結成された（すぐに各国の党が独立、別組織に）。

日本軍仏印「進駐」 第2次世界大戦が1939年9月開始。40年7月フランスがナチス・ドイツの支配下にはいったあとの同9月、日本軍が仏領インドシナへの進駐を開始（その後さらにフィリピン、蘭印へと侵攻）。1841年シアヌーク殿下（皇太子）が父親に代わって王位についた。

大戦終結—インドシナ戦争

民族解放のチャンス 1945年8月日本降伏、ホーチミンに率いられ独立宣言した「ベトナム民主共和国」（ベトミン）と南部にカイライ政権をつくって植民地維持を図るフランスとの間で（第1次）ベトナム戦争。

フランスは1953年ラオスの独立を認めたが、王制派、左派、中立派の3勢力の内戦に。

シアヌークは戦争回避に全力をあげ、交渉によって1953年独立を実現した。冷戦のなかで中立を掲げ、ネルー（インド）、スカルノ（インドネシア）とともに非同盟運動のリーダーの一角を担った。1960年仏教社会主義を掲げて国王を辞任、国家元首に就いた。

仏敗退・米がリリーフ ベトナムでは仏軍が敗退、1954年ジュネーブ国際会議は17度線で兵力を南北に引き離す停戦と2年後の総選挙で合意。総選挙をすればホーチミンによる共産国家が生まれるのは確実とみられ、米国は協定調印を拒否して南部政権の存続を図った。1959年ごろから「南」で解放戦線ゲリラの活動が活発化して第2次ベトナム戦争が始まった。

シアヌーク追放クーデター 米国はフランスの轍を踏んだ。1969年発足のニクソン政権は泥沼戦争から脱出を図る。ベトナム、ラオス、カンボジア3国国境地帯のジャングルは北のベトナム民主共和国から南への兵員・武器の補給路。米軍に追われたゲリラが逃げ

込む「聖域」でもあった。

米国は「ゲリラ掃討」をシアヌークに迫ったが、軍事介入は拒否。シアヌークが中国、ソ連を訪問中の1970年3月、米国の後押しで右派將軍ロン・ノルがクーデターを起こして軍事政権を樹立。米軍は直後に南ベトナム軍を率いてカンボジアおよびラオス領内に侵攻し、「聖域」からゲリラを追い出した。一時的でもいいから戦況好転を図り、「名誉ある撤退」の装いをこらすというのがニクソンの筋書きだったとされる。

不条理な戦争、恐怖政治、代理戦争

「裏戦争」 クメール・ルージュ（赤いクメール）と呼ばれたカンボジアの左翼ゲリラはこれに乗じて国民の支持が厚いシアヌークを担ぎ上げ、反米・反ロン・ノルの武装闘争を開始、カンボジアはベトナム戦争の「裏戦争」に引き込まれることになった。にわか仕立てのロン・ノル政権軍にはクメール・ルージュと戦う十分な体制も意思もなかった。

米国は結局は5年後、カンボジア、ベトナム両国で屈辱的な敗北を蒙る。1975年4月首都プノンペンが陥落、クメール・ルージュが全土を支配した。ベトナムでも2週間後、解放戦線・北ベトナムがサイゴンを制王、2次にわたるベトナム戦争は終わった。だが歴史的な敵対関係にあるカンボジアとベトナムの間ですぐに、次の戦争が始まった。

ポル・ポト政権 ポル・ポトが主導する新政権は徹底した反帝国主義・反西欧主義をとり、都市を空っぽにして全国民を「サハコー」（強制収容所）に押し込み、農作業や灌漑工事に駆り立てた。過酷な労働と飢えで多数が死に追いやられた。

学者、官僚、教師、医師ら知識層と分かれば全て帝国主義者として処刑。指導部内の権力闘争が始まると、ポル・ポト派は反対派を米帝国主義あるいはベトナム帝国主義の手先として粛清。3年半余りの間に人口770万人のうち約200万人（170万という数字も）が命を失ったとされている。

親ベトナム政権 1979年1月ベトナム軍がクメール・ルージュ内の親ベトナム勢力を押し立てて侵攻、ヘン・サムリン政権を樹立。ポル・ポト派はタイ国境のジャングルに逃げ込んだ。親ベトナムのソ連がヘン・サムリン政権を承認・支持、反ソの中国と米国が大虐殺のポル・ポト派の後ろ盾になり、内戦は大国の代理戦争と化した。

国連管理下の選挙 冷戦が終結して代理戦争にも終わりがきた。1993年に国連監視の下で制憲議会選挙が実施され、シアヌークを国王とする新王国が誕生するとともに、第1党・民族統一戦線党首ラナリット殿

下（シアヌークの息子）と第2党・人民党党首フン・センを共同首相とする新政権が樹立された。

選挙をボイコットしたポル・ポト派は生き延びる基盤を失い、最高指導部が次々に投降、ポル・ポトもナンバー2、タ・モクに実権を奪われてまもなく病死、タ・モクも1999年拘束されてポル・ポト派は消滅した。だが、新政権が全土の治安を確保するにはさらに5年余りかかった。

長期強権支配に転機か

フン・センが実権掌握 新政権がラナリット派とフン・セン派の対立で混乱が続く中で、軍部を基盤にするフン・セン首相が1997年、ラナリット首相を追い落して実権を掌握、2006年上院選、08年下院選をへてフン・セン強権体制が確立した。

同首相の権力基盤は人民党。もとはインドシナ共産党の流れをくむ1951年創設の人民革命党。ポル・ポト派も同根だ。ヘン・サムリン政権から新政権への移行に当たって党名から「革命」を外した。実態は軍部と一体的な軍事政権。全土のどこでも主要道路沿いに人民党支部のこぎれいな建物が目に付く。

野党が躍進 フン・セン体制が2013年下院選挙で転機に立たされている。人民党は大きく議席を減らし、辛くも58議席で第1党を維持した。だが55議席を獲得した野党・救国党は不正があったとして選挙結果を受け入れず、1年近く議会をボイコットした。

高度経済成長 フン・セン統治は外国援助と外資導入による経済開発路線を推進してきた。2000年に年4%の高度成長が始まり、06年に10%超え。リーマンショックで09年は-1.9に落ちたが10年以降は7%前後に回復している。

この間、1人当たりGDPも政権発足時の200ドルから07年に500ドル超え、13年に950ドル。14~15年には1000ドルを超えたとみられる。ポル・ポト時代に575万人まで減っていた人口も、かつての2倍、1541万人（2014年推定）になった。

賃上げデモやスト プノンペンには官民の巨大ビルが立ち並び、渋滞を縫って走る黒塗りの高級車が増えた。KEAFが支援する農村にも2010年ごろから道路の舗装が始まり、電気も点くようになった。父親、次に兄や姉の首都や経済特区へ出稼ぎがはじまり、学業を打ち切って働きに出るKEAFの高校奨学生も急に増えてきた。

だが、それで村の生活がよくなったわけではないし、彼らが出ていった都市でも賃上げを求めるデモやストライキが始り、警官隊との衝突も起こっている。

「救国の英雄」にみるベトナム概史

首都ハノイ（北部）、経済の中心ホーチミン（南部）をはじめ、ベトナムの大きな町を訪れると、同じ名前のメインストリートがどこにでもあることに気がつく。ベトナムの2000年余りの歴史は中国、蒙古、あるいはフランスの侵略に対する絶え間ない戦いに彩られている。その民族の戦いを率いた皇帝や将軍たちの名前が主要な道路に冠されているのだ。

そんなベトナムの歴史の節目に登場する英雄を紹介する。◎を付したのはホーチミンの中心部の道路の名前になっている。

○チョウ・タ（趙佗）

BC207、秦に反乱を起こし、中国南部に拠って南越皇帝を称した。漢はBC111、趙王朝を滅ぼし、直接支配のために交趾郡を置いた（現在のハノイあたり）。

◎ハイ・パ・チュン（陳姉妹の意）

BC40~43年、中国総督（交趾郡太守）の重税取り立てなど苛酷な支配に対する反乱を率いた勇敢な姉妹。3年間にわたって独立。しかし漢軍に滅ぼされる。

○リ・ビ（李贲）

反乱を起こして544年、国名を万春、南越帝を名乗るが、602年隋に滅ぼされる。次の唐は安南都護府を設置して支配体制を強化。9世紀には阿倍仲麻呂（中国名・朝衡）が長官に任命されている。

○リ・トゥン・キエツト（李常傑）

宋の侵略軍との戦いを率いた将軍。1076年、如月江と紅江で宋の水軍を壊滅させた。科挙制度を取り入れるなど官僚制度を整備。

◎チャン・フン・ダオ（陳興道）

13世紀には3回にわたってモンゴルの侵攻を受けたが、撃退。モンゴルの大軍はベトナムを通過して南から宋を攻めようとしたが、陳王朝は通過を拒否。3回目の戦いとなった1286年、バクダン江でモンゴル軍を全滅させた。この戦争を指揮したのがチャン・フン・ダオで、優勢なモンゴル軍を徹底したゲリラ戦で打ち破った。ベトナム戦争で米軍を翻弄したゲリラ戦略はここにはじまる（チャン・クオック・トアン・陳国俊とも呼ばれる）。

◎レ・ロイ（黎利）

明の永楽帝が15世紀はじめ侵攻、制圧。レ・ロイが反乱を率いて10年にわたって抵抗戦を続けた末、1426年紅河の決戦で明軍を破る。明と和議、安南王に叙せられる。黎王朝繁栄の基礎を築く。

○レ・タイン・トン（黎聖宗）

15世紀後半にチャンパ王国（現在の中部ベトナム）やラオス高原を併合し、ベトナム中興の祖とされる。

◎グエン・フエ（阮恵）

黎王朝は16世紀に入ると滅亡し群雄割拠。グエン（阮）氏が勢力を拡大、18世紀までに南ではカンボジア領のメコンデルタを併合、北では紅河デルタを支配。清の乾隆帝は遠征軍を派遣するが、グエン・フエは1789年の「ドンダの戦い」（ハノイの近く）で清軍を打ち破った。乾隆帝はグエン・フエを安南王に叙した。

○グエン・フック・アイン（阮福映）1804年全ベトナムを統一、フエに首都をおいて初代皇帝ジャロン（嘉隆）帝を名乗り、清朝から印綬を受け越南国王に叙せられた。

◎ハムギ（緘直）

中国で1856年アロー号事件が起こり、英国とフランスが中国に天津条約を押し付けた。フランス海軍はその足でベトナム中部、ダナン軍港に侵入、ベトナム侵略を開始。フランスは直轄植民地のコーチシナ（南）、保護国のアンナン（中部）、半植民地・半保護国のトンキン（北）と3分割して支配した。

1885年ハムギ帝はレジスタンス勢力とともに蜂起、仏軍襲撃を試みるが失敗、逃避行の末逮捕され、アルジェリアに流刑されて死去した。

◎ファン・ディン・フン（潘廷逢）

宮廷勤務の後、地方行政官を勤めていたが、逃走中のハムギ帝からレジスタンスの司令官に任命された。ジャングルを根拠地にゲリラ闘争を10年にわたって率いたが、1895年病を得てジャングル基地で死去。

○グエン・タイ・ホック（阮大学）

ベトナム国民党を率いて反仏武装蜂起、失敗して1930年処刑された。

近くて遠い隣国

カンボジア、ベトナム、タイ

メコンデルタの民

ベトナムの食糧庫といわれる南部の広大なメコンデルタは、アンコール王朝からベトナムが数百年にわたって蚕食し併合した。このため首都プノンペンを含めて、ベトナムとの接点になる現在のカンボジアの南東部にはベトナム人ないしカンボジア・クロームと呼ばれる混血の住民が多く居住している。

彼らは温和でのんびりしたカンボジア人に比べるとすばしっこく商売上手で、町の経済を中国系と競い合っている。レストランや屋台のベトナム式のそばやコーヒーはカンボジア人のものにもなっている。

カンボジア人は普段は表に出さないが、ベトナム人が嫌いな人が多い。軍事クーデターに続いてカンボジア戦争が始まり、米軍と一緒に南ベトナム軍がカンボジア領に攻め込んだ。この混乱が引き金となって、カンボジア人がベトナム系住民を襲い、多数を虐殺したことがあった。

右上の写真はプレイヴェン州プレアスダイからベトナムに通じる国境検問所。地元住民は身分証で自由に行き来が許されている。



「フランス」通りもある。プノンペンはかつてアジアのパリと呼ばれた。侵略者で過酷な植民地支配をした国だが、目抜き通りに名前を冠してカンボジアの歴史に深くかかわった事実を受け入れている。

「シャルル・ドゴール」は仏将軍。大戦中亡命政権を率い、戦後すぐ引退。アルジェリア危機で 1958 年復帰、第 5 共和政初代大統領としてアルジェリア独立を受け入れた。仏歴史の英雄だ。しかしホーチミンの道路のように外敵と戦った「救国の英雄」の名前はない。歴史と国民性の違いだろう。

カンボジアと KEAF

奇跡の生き残り

「クメール・ルージュの兵士がプノンペンに突入した」—1975 年 4 月 17 日、カンボジア戦争終結の第 1 報を世界に打電したのは、共同通信カンボジア支局のコン・ボーン記者だった。その直後、国外との通信は途絶、ポル・ポト政権の恐怖政治が始った。

コン・ボーンさんはポル・ポト派兵士の処刑を奇跡的に逃れ、1980 年家族とともにタイに脱出。共同通信の仲間が身元引受人となって日本で難民生活を送った。1993 年の国連監視のもとで制憲議会選挙が始まり、コン・ボーンさんは脱出後はじめて一時帰国、郷里プレイヴェン州プレアスダイを訪れて、衝撃を受けた。学校がひとつも残っていなかった。

教育支援始まる

カンボジアが不幸な歴史を繰り返さないためには、まず次代を背負う子どもたちの教育を再建することだ。コン・ボーンさんはそう考えた。共同通信の仲間が力をあわせて、カンボジア教育支援基金が設立され、運動が始まった。

「タイを撃退」したことも

西側からカンボジアを圧迫したタイも、カンボジア人は好きではない。アンコールワットなどの巨大遺跡群があるシエムレアップという地名は「タイを撃退した」という意味だそう。当時はカンボジア民族がタイ民族を圧倒してこの地域に 6 世紀にわたって首都を置いた。

カンボジアの最北部、アンコールワットより 1 世紀ほど古いヒンズー寺院プレア・ビヘアの遺跡は 2008 年カンボジアが申請して世界遺産に登録された。タイは遺跡は自国領内と主張して紛争になり、部隊の衝突も起きている。

プノンペンの大通り

首都プノンペンの目抜き通りにはどんな名前が付けられているかをみよう。

「モニボン、シソワット、ノロドム」はいずれも王家一族を形成するファミリーの名前。「シアヌーク」は波乱の時代を生きたご存知の王様。「毛沢東、ネルー」は友好・支援国の指導者。ネルーは独立インドの首相でシアヌークとともに非同盟運動のリーダー。

「ジャーナリストの墓場」

記者、カメラマン 37 人が犠牲に 危険いっぱいだったカンボジアの戦場

カンボジアの戦場は“ジャーナリストの墓場”と呼ばれた。シアヌーク殿下を追い出すクーデターで突如始まったカンボジア戦争の最初の 9 カ月で記者、カメラマン 26 人が命を失った。クメール・ルージュのゲリラにつかまり殺害されたり、行方不明になったまま帰らなかったりした。ベトナム戦争取材のベテランたちも、「顔」を見たことのなかったクメール・ルージュがどれほど危険な勢力なのか、どんな戦争をするのか、を知らないまま飛び込んで行ったからだ。

これでジャーナリスト側も用心深くなった。それでも米国が後ろ盾になった親米軍事政権がもろくも崩壊し、ポル・ポト政権の恐怖政治に移るまでの 4 年間でさらに 11 人、合計で 37 人が犠牲になった。日本人は 10 人で最も多くの犠牲者を出した。フランス 8 人、米国 7 人が続いている。

国際ジャーナリスト慰霊碑を建立

懸命に中立を保とうとしていた小国カンボジアを無理やりに引きずり込んだ、不条理に満ちた戦争。その実相を世界に伝えようとして命を捧げた彼らを永く記憶し、その魂を慰めようと、2012 年 5 月にプノンペンに慰霊碑が建立された（写真は共同通信プノンペン支局提供）。



建立場所はプノンペンを象徴する「プノムの丘」とメーンストリートのモニヴオン通りを結ぶグリーンベルトの中央部。戦争中には内外のジャーナリストのたまり場になっていたホテル・ル・ロワイヤル（当時はル・プノム）の真ん前です。名前を刻まれている日本人に石山幸基共同通信プノンペン支局長と、ピューリツァー賞受賞の澤田教一さん、写真集「地雷を踏んだらサヨウナラ」で知られる一ノ瀬泰造さんの両カメラマンがいる。

慰霊碑建設計画を推進したのは、戦争中のプノンペン政府軍スポークスマンで、多くの国際ジャーナリストと親交のあったチャン・ソンさん（現政府顧問、米国在住）とカナリット情報相で、これを共同通信のプイ・キア記者らカンボジア人記者会が後押しした。建設費の半分は

共同通信の元ベトナム、カンボジア特派員など石山記者の先輩や同僚のカンパだった。

石山記者慰霊碑、夫人が建立

国際ジャーナリスト慰霊碑からほど近いカンボジア仏教の総本山ウナローム寺院の墓地に石山記者の慰霊碑がある。陽子夫人が同じところに建てた。

石山記者は 1973 年取材中に消息を絶った。8 年後、東の間の内戦休息期に共同通信調査団が陽子夫人ら家族とともに現地調査に入り、コンボンスプー州北西部ジャングル地帯のクメール・ルージュ秘密基地で病死、ゲリラ兵士の共同墓地に埋葬されたことが分かった。



しかし内戦が激化してそれ以上の調査は不可能となったまま 27 年が経過、2009 年 1 月ようやくこの地域の治安も落ち着き、夫人と長男、当時の共同通信同僚のチームがこの秘密基地跡に到達、墓地を確認した。行方不明になってから 35 年余りが過ぎ去っていた。

（『カンボジア通信』64 号 2012 年 9 月から転載）

メトロポリタン美術館が2体返還へ

カンボジア歴史遺産が国外流出 米で6体発見、内戦の混乱で盗掘、盗難

アンコール王朝時代の遺跡から盗掘されたり盗まれたりしたとみられる貴重な歴史遺産の石像6体が、米国各地の権威ある博物館や美術館などの手に渡っていることが分かり、カンボジア政府が返還を求めている。一部は返還に応じる方向だが、裁判になっているものもある。

アンコール王朝を通して首都はアンコール遺跡群で知られるシエムレアップ地域におかれたが、王族内の権力争いから928～944年の期間だけ北東100キロのコー・ケルに首都が移された。石像はこの時期に建造された40ほどの寺院のなかのひとつ、プラサト・チェンにあったものとされている。いずれもヒンズー教の叙事詩ラーマーヤナやマハーバータラに登場する神や人物をかたどった美術的価値も高い石像。

ニューヨーク・メトロポリタン美術館はこのうちペアの「膝まずく戦士」の石像を、東南アジア・ギャラリーの入り口に20年来陳列してきた。同美術館はこの2体が盗掘・盗品であることが分かったとしてカンボジアに返還することを決めた。ほかの3体はノートン・シモンズ博物館（カリフォルニア州パサデナ）のレスラー像、クリーブランド美術館のラマ神像、デンバー美術館の首のない猿神像で、これらはまだ返還に応じるか決着がついていない。最後の1体はニューヨークの著名なオークション業者ソトビーズが所有するアスリート像。ソトビーズは2011年にこのアスリート像をオークションにかけたが、カンボジア政府の抗議で取り下げた。同社は返還を拒否して裁判になっている。

国連（ユネスコ）は1970年、歴史遺産である考古学資産や美術品の闇取引を禁止する議定書を採択した。カンボジア戦争が始まったころだ。ソトビーズのアスリート像以外の5体は、この協定成立の後の1980～90年代に入手したとしている。

カンボジアではその1970年に中立政策をとる元首シアンヌーク殿下がクーデターで追放された。背後に米中央情報局（CIA）がいたとされ、軍部右派の新政

権は米国のベトナム戦争に協力、左派クメール・ルージュとの内戦が始まって90年代後半まで悲劇的な混乱の時代が続いた。この間にプラサト・チェンばかりでなく、国内の多くの遺跡から歴史遺産が美術品として闇ルートを通して欧米に流失したとされている。

米国内では6体のほかにも数10体の石像などが美術館や収集家に高額で買い取られたとみられている。メトロポリタン美術館やほかの美術館は、いずれも違法な売買とは思わなかったと説明している。

盗掘・販売一闇の国際ネットワーク

カンボジアに限らず、イタリア、ギリシャ、エジプト、トルコなどで歴史的な文化遺産が盗掘されたり、盗まれたりして国外に持ち出され、高値で売りさばられてきた。

1970年ユネスコ議定書によって国際的な取り締まり体制が強化された。だが「闇のビジネス」を取り仕切る国際ネットワークの根絶は容易ではない。米連邦捜査局（FBI）はこのマーケットで動く金は米国だけで年間60億ドルに上るとみているという。

少し古い英ガーディアン紙の2002年の特集報道によると、闇のネットワークの中継点となってきたのがジュネーブ。ここに持ち込まれた盗品は5年経過すると、その出所や持ち込みの経緯などはあいまいなまま「商品」のお墨付きが与えられ、その多くはロンドン、ニューヨーク、

パリなどに「出荷」が可能になる。いわゆるロンダリングである。メトロポリタン美術館、大英博物館、ルーブルなどの権威ある博物館や美術館もこれを購入する。金額は数千万ドルから数億ドル（数十億円～数百億円）に及ぶものも少なくない。

最近の国際的なナショナリズムの高まりで、イタリア、トルコなど流出元の国が1970年以前にさかのぼるものも含めて返還要求を強めていて、訴訟にも訴えている。

〔注〕

- (1) 記事は『カンボジア通信 67号』213年6月から転載。
- (2) プノンペン共同電によると、米国に流出していた6体の彫像は2015年5月までに全て返還された。
- (3) 写真はコー・ケル遺跡のアスパラ彫像。



現地活動支えてくれる

親日ファミリーを紹介します

長女は香ちゃん、長男は金太郎君



KEAF がカンボジア現地の支援学校を訪問するとき、いつもガイドや通訳の役割を担ってくれるのは、OWN・ソワンさんとそのファミリーです。ソワンさんはカンボジア政府の日本語ガイドの資格をとり、日本人訪問客相手の観光案内会社を営んでいるビジネスマンです。KEAF はその常連客ということになります。KEAF とソワンさんの付き合いはもう 10 年を超え、KEAF にとってソワンさんはカンボジア事務所長といった関係になっています。ソワンさんファミリーの支援なしには KEAF のスムーズな現地支援活動は大変に難しいと言ってもいいでしょう。

現地の支援学校の要望を聞いて教科書や支援品をそろえて届け、奨学生の面接をし、サッカーや子供の遊びを教える教室を開くといった私たちの支援活動には、ソワンさん、甥のワンターさん、夫人のソペアックさん、その弟のナットさんの誰かが同行してくれます。私たちが暑さにぐったりして車の中で居眠りをしている、ちゃんと目的の訪問校に連れて行ってくれます。

限られた訪問日数の中で 14 校の校長先生と事前連絡を取って日程を調整してくれるのもソワンさんファミリーです。学校側の事情はどうか。KEAF ができる支援はどこまでか。ソワンさんはそのあたりも大体、頭に入っています。

左の写真の向かって左がソワンさん、右が義弟のナットさんです。ソワンさんは少年時代にボル・ポトの恐怖政治を生き抜いて、カンボジアに布教にきた日本人お坊さんから日本語の手ほどきを受けたそうです。他のメンバーはいずれもカンボジアの最高学府、プノンペン大学の日本語学科を卒業しました。ソペアックさんは子育てしながらの勉強でした。みんな日本訪問の経験もあります。でもソワンさんだけは飛行機に乗るのが怖いようで、日本に来たことはありません。

皇太子殿下が昨年 6 月カンボジアを訪問したとき、奥さんは空港で皇太子を出迎えるカンボジア政府スタッフの一員に選ばれました。ナットさんは皇太子がプノンペン大学を視察した時、学生の代表として日本語で歓迎のあいさつをしました。

ナットさんは高校時代はサッカーに夢中だったので、「サッカー教室」では小林コーチの助手も務めてくれます。ワンターさんはカンボジア政府や企業などの日本訪問団の同行通訳に請われて日本を訪問することもあります。カンボジア有数の日本語の使い手です。



ソワンさんのファミリーを紹介するとなれば、2人の子どもさんを抜かすわけにはいきません。上の写真の向かって左が長女の香ちゃん（4年生）、右が長男の金太郎君（3年生）です。どちらも本名。ソワンさんの親日家ぶりが徹底していることがこれでよく分かります。

（『カンボジア通信』67号、2013年6月より転載）